



▲観音庵への階段



▲安政南海地震 津波来襲地点の石標



◀昭和南海地震 津波来襲地点の石標

背景

昭和21年（1946）の南海地震の時に、自宅とは別の旅館で宿泊客の世話をしていた夫が、妻と子どもたちの安否を気遣い、浅川の自宅付近に戻りました。子どもたちは無事山に避難していましたが、妻は亡くなっていました。一旦、家から逃げたものの、荷物を取りに帰ってきて津波にのまれたようです。この話は妻を亡くした夫が語る体験談で、地震の後は早く逃げるのが大事だと言っています。

アクセス 観音庵

- 海陽町浅川出張所より北へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分37秒，東経134度21分42秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震で妻を亡くした夫の体験談です。

地震の時、わしの旅館にはちょうど森繁久彌さんが来とって、二階で寝よった。森繁さんに「ここで夜が明けるまで動かれんぞ。わし、帰るわ」言うて、浅川の自宅に自転車で向かった。浅川の端へ来たら、ドーと波が来て、大きな貨物船や機帆船きはんせんが流れてきよった。それが一番最後の潮やつた。夜を明かし、胸まで水に浸かってようやく自宅にたどり着いた。

家の辺りは流れてしもとった。わしは子供を捜した。無事山へ逃げとった。「お母さんはどうしたんな」と聞いたら、「お母さん見えん」という。「もしかしたら、やられとるかも分からん」と思うて下へ降りたら、いとこが「おまえくのお母さんみたいな人が死んどる」いうて初めて分かった。浜にようけ積んであつた材木がどつと流れて来て、家内はそれに足をとられて死んどった。逃げる時、上の子が下の子を負うて家内も一緒に逃げたんやけど責任感の強い女で、「おとうさんもおらんし、こら子供のもん持って逃げとらんいかん」思つてもどつて来たんやろ。

ここの人は天神さんに逃げたんやけど、三回か四回波がきた。天神さんの石段の一番上まで波がきとつた。津波というもんは、浜で渦のようにまうもんらしい。ほれに、二階建ちの家が下をとられてしもて、そのまま二階がパタンと落ちてしもたり、えらいもんやな。

あんな大きい地震や津波の時は、「はよう逃げ、はよう逃げ」いうたらないかんけど、中には「こんな所まで津波が来るか」いう人もおる。ほんやけど、そんな時は素直に人のいうことを聞いて逃げるがええんではないかと思う。